

2023. 4. 23 (日) 使徒7:51~53

7:51 うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。

7:52 あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が、だれかいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって告げた人たちを殺しましたが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

7:53 あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」

<説教>

同胞ユダヤ人に向かってのステパノの説教の言葉は、本日聞くところが最後となります。「ステパノがモーセと神を冒瀆することばを語っている」、また、「ステパノは神殿と律法に逆らうことばを語るのをやめない」、そして『『ナザレ人イエスが神殿を壊し、モーセの律法を変える』とステパノは言っている』（要するに「ステパノはイエスが神殿とモーセを冒瀆して言ったことばを人々の間に言い広めている。イエスの仲間だ」ということ）。これらが、ステパノがユダヤ人たちから最高法院に訴えられた内容でした。

それで、そのユダヤ人たちに扇動された民衆、長老たち、律法学者たちが傍聴する中、最高法院でステパノの裁判が始まりました。その場でステパノは聖書によって、まずアブラハムをお召しになり、お導きになった「栄光の神」を証しました。またその神から召されて同法イスラエルの民をエジプトから導き出し、神から生きたみことばを授かって民に伝えたモーセのことを証しました。そのようにしてステパノは自分が神とモーセを冒瀆しているのではなく、むしろ反対に、神を崇め、神に栄光を帰し、また神のしもべモーセを重んじていることを証しました。そうやってステパノはユダヤ人たちの訴えに反論しました。そして同時に、モーセに従わず、退け、偶像礼拝に陥り、神に反逆した（反逆し続けた）ユダヤ人（イスラエルの民）の罪を明らかにしました。そしてそのような罪に対する神の怒りとさばきをも証しました。

そして「ステパノは神殿と律法に逆らっている」という訴えに対してステパノは弁明しました（44-50）。ここでは、ステパノは、自分は神殿と律法に逆らっていないという言い方ではなく、自分を訴えているユダヤ人たちが神殿について間違っ理解し、用いている、と指摘するのです。彼らは人の手で造った建物に過ぎない神殿を過剰に重視している一方、神を誤って過小評価している、と言います。天地万物をお造りになった神は確かに神殿にもおられますが、神殿にだけおられるのではなく、天地のどこにでもおられるお方です。もちろんそんなことは少し考えればだれでも分かることです。ではそんなに神殿が大事なら、当時、神殿で神のみこころが行われていたのでしょうか。それが問題でした。そうではありませんでした。イエスが十字架で殺される前に、神殿でいわゆる「宮きよめ」をなさったことがありました（マタイ 21:12-13、マルコ 11:15-17、ルカ 19:45-46、ヨハネ 2:13-16）。立派な建物ではありましたが、そこは商売の場、「強盗の巣」と化していて、神殿本来の「祈りの家」にはなっていませんでした。そのことを指摘された祭司長たちや律法学者たちがイエスを憎んで殺そうとしたのでした。ステパノが引用した（49-50）はイザ

ヤ 66 章 1 節と 2 節の前半でしたが、実は 3 節には続けて、神殿で律法の規定どおりに多くの献げ物がなされてもそれが神には全然受け入れられていない、喜ばれていない、むしろ忌まわしい人殺し、異教の礼拝、偶像礼拝と見なされていたことが書かれています。神殿と律法の外面、形式は守っていても、その心が全然神の方を向いていません、みこころにかなっていませんでした。

ステパノを訴えたユダヤ人たち、また祭司や律法学者たちも、当然このイザヤ書をよく知っていました。ステパノが語ったイザヤ書の部分を聞いただけで、彼らはステパノが何を言いたいのかわかったはずです。つまり神殿を大事にし、律法に従っていて信仰深そうに見えるユダヤ人たちの心は、その見た目とは反対に自分勝手に、神のみこころにかなわず、その礼拝は人間から出た礼拝、偶像礼拝だということです。

そのような神と神のみことばへの背信、反逆、偶像礼拝が千数百年前の自分たちの先祖の時代から代々繰り返され、続いてきたのだ、とステパノは言うのです。そしてついには、神が備えた〈私たちに与えるための生きたみことば〉(38)なるお方、律法が指し示し、また幕屋・神殿が指し示していたお方、預言者が告げた〈正しい方〉(52)、イエス・キリストを〈裏切る者、殺す者〉(52)にあなたがたはなった、と言うのです。

イエスを受け入れず裏切り殺したユダヤ人たちは、肉体の割礼は受けていましたが、〈心と耳に割礼を受けていない〉(51)、つまり心が神に向いていない、「神のことを思わないで、人のことを思っている」、神のみことばに聞き従っていない(外見は信仰深そうに見えても)とステパノは言うのです。彼らが〈いつも聖霊に逆らっている〉のは、彼らの〈先祖たちが逆らったように〉しているのだ、と(51)。イザヤも〈しかし、彼らは逆らって、主の聖なる御霊を悲しませたので、主は彼らの敵となり、自ら彼らと戦われた。〉(イザヤ 63:10)と言っていました。そのイザヤほかすべての預言者を〈あなたがたの先祖たちが迫害〉して、殺したとステパノは言います(52)。そしてその先祖たちと同じように聖霊に逆らっているあなたがたがイエス・キリストを裏切り殺したことで、先祖たちが繰り返して反逆をついに頂点に至らせた、と言うのです。最後「あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」(53)と言うのは、形の上では、外面は律法を守ったとしても、口では神を敬っていても心は神から遠く離れている、ということでしょう。そのことはイエスが指摘なさっていたことでした(マタイ 15:7-9)。

このように、ステパノはとても厳しい言葉で同法ユダヤ人たちの罪を指摘したのがほとんど最後となりました。ステパノも、ペテロの説教のように、イエスを十字架につけて殺したほどの大きな罪でも、まさにそのイエスの十字架の贖いの故にイエスを信じて悔い改めるように勧めたことに違いありません。しかし、それはかなわず殺されてしまいます。

私たちはイエスやステパノを殺した人々のようではなく、神が預言者を通してお告げになり、この地に来られ、私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた〈正しい方〉イエス・キリストを信じなければなりません。私たちはイエスの「正しさ」、義の衣を着せていただいて、神の目に義、正しいとして頂けるのです。そして、それならば、もうこれまでの罪を繰り返すことなく、また後に続く者たち、子孫にも自分たちが犯して来た罪を彼らはもう繰り返すことがないように彼らに語り教える責任もまたあるのです。